

本賞

ラジオドキュメンタリー 故郷の空に
青森放送訪問記

金田一 秀穂

2010 年は津軽三味線の名人・高橋竹山生誕 100 年の年。竹山は青森県平内町で生まれた。目が不自由だった竹山が日記代わりにしていたのは、カセットテープへの声の吹き込みだった。この未発表のカセットテープと力強い三味線、家族や弟子たちのインタビューをコラージュし、高橋竹山の肖像を探った『高橋竹山生誕 100 年記念番組 ラジオドキュメンタリー 故郷の空に』が、ラジオ番組の本賞を受賞。さらにディレクターの渡辺英彦さんが制作賞を受賞した。

金田一秀穂ラジオ番組審査委員長が渡辺ディレクターを青森に訪ね、お話をうかがった。



今年のラジオ番組の本賞は、青森放送が制作した『高橋竹山生誕 100 年記念番組 ラジオドキュメンタリー 故郷の空に』に決まった。本誌では、毎回優秀作品を制作した会社にお邪魔して、制作した方々にお話を聞くことになっている。それで青森に行くことになった。

青森だから泊りがけになる。私の都合もすでにいろいろ決まっていて、空いていた日をお知らせしたら、偶々青森ねぶた祭りの日に当たってしまった。ねぶた祭りは、死ぬまでに一度は見てみたいと、かねてから思っていた祭りであり、特に今年は意味深い。新幹線もホテルも例年通り混雑していたが、みごとに融通していただいて、隙間を縫っていただけた。

ここで誤解を避けるために特に繰り返すのだが、私はねぶたを見に行っただけではない。取材をしに行ったのだ。それがねぶたの日だったのはあくまでも偶然にすぎない。

はやぶさの有名なグランシートは鉄道ファンの若者たちにとっくに買い占められていて乗れない。グリーン席も満席。しかし、普通車でも十分快適だった。何

せ東京から 3 時間半しかかからないのだ。新青森駅は、従来の青森駅から少し離れている。各地から到着する団体客を待つ観光バスが、駅前広場を埋めつくしている。どこかのスピーカーから、祭囃子の音が聞こえてくる。沿道にはすでに栈敷席が設営されつつある。気の早い屋台も出ている。しかし、祭りの当日にしてはひと気が少なく静かすぎるような幅広の道を通って、早い午後に青森放送に着いた。これが今回の旅の目的の仕事なのである。社長自らのお迎えを受け、番組を制作した渡辺英彦氏にゆっくりとお話を伺えた。

半世紀を超える竹山と青森放送の縁

青森放送は、開局したのが昭和 28 年、開局したときから続いている民謡番組があり、その第一回目から実は高橋竹山が伴奏者として出演しているという。さらに、竹山が全国に注目され始めたのは、昭和 46 年の『寒撥』というドキュメントがきっかけであり、これも青森放送が制作している。恐ろしく縁が深い。

平成 10 年に竹山が亡くなり 13 年になる。平成 22



金田一 秀穂 さん（きんだいち・ひてほ）

ラジオ番組審査委員長

年、生誕 100 年を記念して、多くの弟子たちが集まってコンサートが開かれた。それを番組にする過程で、今回の番組が生まれたという。

コンサートをそのまま音楽番組にするだけでは、あまり面白くない。意欲的なラジオ制作者たちは、さまざまな調査を開始した。そうして、二つの音源を発掘した。

ひとつは、竹山がみずからカセットテープに記録していた肉声である。そこには、毎日どこで演奏会をして、どのように移動したかが語られている。視力のない竹山が、自分のための覚えとして、録音していたという。

竹山は少年のころから、人に聞かせる声で語っていた。私たちも、そのような声しか聴くことができない。しかし、このテープで穏やかに語られているのは、誰に聞かせるわけでもない自分のためだけの声である。いわば独り言に近い。素の声が、素のまま、飾ることなく聞かされる。老いて疲れてはいるものの、温かで優しげな竹山の人柄が伝わってくる声である。

もうひとつの発見は、竹山が、故郷である青森市の隣町、平内町で毎年行っていた公開演奏のテープだった。

語り物としての津軽三味線

津軽三味線は、現在は、三味線の演奏が主流になっている。激しいリズムによって、血が騒ぐ熱気を聴く者に伝える。地方の日本民謡としては珍しく、沖縄音楽と並んで、現代の若者たちにも広く受け入れられる

音楽の一角を占めている。

ただし、津軽三味線は、本来は、門付から出発したものであり、語り物だった。河内音頭や八木節のように、物語を聞いて楽しむものだった。あの迫力ある三味線の速弾きは、あくまでも伴奏者の芸にすぎないものだった。あまりにも見事な三味線の響きによって、私たちは忘れかけているのだが、平内で行なわれている竹山の演奏は、語り物としての伝統を見事に気付かせ、思い出させてくれる。



竹山は海外での演奏も多く、津軽三味線は、芸術として変に高められてしまったきらいがある。そのことについて、竹山がどのように感じていたかは分からない。しかし、故郷平内での演奏は、いわば^{かみしも}袴を脱いで、地元の人々とすっかり溶け込んでいる演奏である。おしゃべりをしながら、語り物としてのさまざまな歌を聞かせていく。演奏会はコンサートではなく、村の集まりであり、竹山はアーティストではなく、門付け芸人である。しわぶき一つせず、恐る恐る緊張しきって聞かなければならない都会のホール会場ではない。聞く者たちも、偉大な芸術を聞いているという気分は一切ない。帰ってきた故郷の名人の芸を、にぎやかに騒ぎながら、笑いあって楽しむ祭りの余興芸なのだ。

同じ東北に、遠野物語がある。しかし、実際に遠野に行ってみると、柳田國男があえて採録を避けたのであろう滑稽なもの、下ネタ的なものが、たくさん語られている。それでこそ大人の楽しめる民話である。

竹山の語りにも実はそのようなものがいっぱいあって、放送では編集で自粛したという。しかし、そのことを十分想像させる部分が、番組にも採られており、津軽三味線が、津軽の地で、実際にどのように受け入れられ、愛されてきたのかが理解される。

若い世代へ引き継がれるネットワーク

青森放送と竹山の縁は深かったのだが、死後12年たつ。そこで改めて竹山を取り上げるのは、青森放送の使命でもあるかもしれない。幸い多くの生テープが局のアーカイブに残されている。それらを駆使し、さらに調査を深め、先輩たちの築き上げたネットワークに乗り、没後10年たった時間経過の中で濾過され、また見えてきた竹山を作品に仕立てた若い世代の知恵が、今回の作品に結実したと言える。

竹山は盲目の天才音楽家である。孤高の、頑固で気まぐれな老人を想像させてしまう。しかし、渡辺氏は竹山と直接話したことがない。だが、弟子には恐ろしく厳しかっただろうけれど、その人柄はサービス精神にあふれ、とても優しくなったにちがいないという。そのことが番組を通じて伝わってくる。それは制作者である渡辺氏の人柄の反映でもあるように思えた。

鎮魂のねぶた

取材を終えて、おいしい寿司をごちそうになり、ねぶたを見せていただいた。本当であれば、東北新幹線が新青森駅まで開通した記念すべき年であるのだが、今年のねぶたは鎮魂です、と誰ともなくおっしゃったのが聞こえた。そうなのだ。

大きなお祭りとしては珍しく、神事ではない。どこの神社ともお寺とも関わっていない。しいて言えば、ここで祀られているのは三内丸山集落の昔から続く津軽の地霊であり、津軽に生まれた人々である。土色を帯びた原色に彩られ、幅広の巨大な飾り燈籠が、ゆらりと揺れて、人々の「らっせ、らっせ」の掛け声の中、進んでいく。笛や太鼓の囃子が、昼間の熱気の去った



今年は22台のねぶたが運行



渡辺 英彦 さん（わたなべ・ひでひこ）

青森放送ラジオ編成制作部長

1960年青森県八戸市出身。83年青森放送入社。テレビ制作部、東京支社編成部を経て、93年から本社ラジオ制作部。97年『ラジオドラマ まんずまんず物語～為信のクリスマス』。99年『ラジオドラマ シュウさんと修ちゃんと風の列車』、03年創立50周年記念CD等制作。2009年から現職。

大通りに響く。このような風土の中で、例えば太宰治が育ち、棟方志功が育ち、そうして高橋竹山が育てられたのだ。

祭りの後も、近くの民謡酒場で、三味線や民謡のライブを聞かせてもらった。小さな子供まで、おとなたちと一緒に太鼓の撥をふるう。伝統の継承などという事々しい言葉を使うまでもなく、ごく自然に当たり前のこととして、そのようになっている。めでたい言葉を連ねただけの、他愛のない大黒様の踊りがあった。朝のテレビ番組で見る今日の運勢などよりも、よほどありがたい功德があるのではないかと実感させられる。

青森放送は、津軽三味線を含め、民謡に力を入れている。現在キー局での民謡はほとんど聞かれることがない。NHKでさえ、めったに聞けなくなってしまう。ラジオ局長である大友寿郎氏の考えによるのだろうが、その直々の解説を聞きながら、青森の民俗音楽に触れる一夜が更けていった。

翌朝は古川市場でのつけ盛りを堪能し、新鮮な海産物を東京へのお土産に買いあさった。帰りの新幹線でも、青森の音楽が耳に残っていた。

青森放送が素晴らしい番組を作ったおかげで、私まで、このような嬉しい体験ができたのだ。多謝。